

自然と人間との共生

# KOSMOS

第12号

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会



EXPO'90  
FOUNDATION

こすもす

2023

秋



人はなぜ  
「衣」を  
まとうのか？

# 人はなぜ

# 「衣」を

# まとうのか？

衣は、保温や身体の保護による命の維持だけではなく、人の社会性、文化性の持続に欠かせないものとなっている。地域、民族、そして個性の表現から機能性、さらに秩序にまで関係している衣。さらに、タトゥ、装身具を身にまとい、化粧や整髪をして、個人を演出している。ヒトが人であるための「まとい」とは何か。この多様な「衣」を通して、人の本性を考える。



苧麻から績まれた糸（福島県昭和村） 撮影：鞍田 崇

## 糸づくり、 ものづくりの現場へ

**鞍田** 私はもともと大学で哲学を専攻し、ハイデッカーやメルロ・ポンティなどの現象学を研究していましたが、卒業後に京都の総合地球環境学研究所に勤務すると、食のプロジェクトで、焼畑農業の見直しなど、フィールドワークに携わるようになりました。

焼畑研究の一環で訪ねた福島県昭和村では、昔ながらの方法で、苧麻を栽培し、糸をつくり、布にしていました。苧麻はイラクサ科の植物で、大麻と並んで古くから日本で栽培されてきた衣料素材です。昭和村の苧麻との出会いをきっかけに、かねてより民芸に寄せていた関心が深まり、なかでも布の営みには強く惹かれました。

**金谷** 私の専門は文化人類学で、

2

「巻頭特集」

人はなぜ「衣」をまとうのか？

3 「対談」

身の回りのものができる

「プロセス」を見直す

鞍田 崇×金谷 美和

12 「探求コラム」

池谷和信

井上章一

14

「私を育てた（風と景）」

古の色を伝える植物染めと祖父が挑んだ幻の染色技術

吉岡更紗

16

「いぶきの輪っか」

南アルプスから考える自然との共生

秋道智彌

18

「近代学匠伝」

コスモス国際賞二〇〇三年受賞者

ピーター・ハミルトン・レーブ博士

21

「日本植物紀行」

絶滅が危惧される淡水産の紅藻類

チスジノリ

22

「協会事業紹介」

普及啓発事業

牧野富太郎スタンプラリー・シンポジウム

24

「日本の伝統園芸植物」

日本人の感性のなかで独自に発展

菊

## 対談

# 身の回りのものができる 「プロセス」を見直す

## 鞍田 崇 × 金谷 美和

明治大学准教授

国際ファッション専門職大学教授

主に日本とインドをフィールドに、手仕事の継承と社会的要件について研究をしています。インドでは、西部のカッチ地方で布の染色を産業とする職人集団カトリーの工房に二十年以上通っています。職人の仕事や、染め物を注文・着用する客との関係をみていくと、ものづくりが社会に埋め込まれて営まれていることがわかります。

インドでは伝統的に、カーストと職業が結びついて社会のなかで必要とされる仕事の分業が行われていました。布はできるまでの工

程が複雑で、一枚の布が完成するまで、糸をつくる人、織る人、染める人、刺繍などの加飾をほどこす人というように、様々な人が携わっています。

「糸は誰かが紡いでいた」という驚き

**鞍田** 昭和村に行くまで、それほど布に関心があったわけではありませんが、しかし、布づくりの工程に触れるうちに、その手間ひまの途方もなさに驚くと同時に手仕事の本質に思い至りました。

苧麻を糸にするには、簡単にい



丹後藤織りの素材となる野生の藤蔓の採取（2022年、京都府宮津市） 撮影：金谷美和

うと茎の芯を取り、外皮から緑色の肉質の部分を削ぎ落とし、「キラ」とも呼ばれる真っ白い部分を取り出します。その繊維を裂いてつないで糸にするのですが（これを「績む」といいます）、繊維の長さはせいぜい一メートル。それをひたすらつないでいくわけです。この時間のかかる作業を見て、初めて「糸は誰かが紡いでいたんだ」と強い衝撃を受けました。最初から何百メートルもの糸があるのでなく、誰かがつないで糸にするという途方もない作業があり、素材がつくり出されてくる。そのうえに機織りがあるという素朴な事実

私にとって素材は、それまでどこから買ってくるものでした。だから、すべてを手でやっていただくことを見せつけられて、「手仕事を舐めていた」と実感しました。  
**金谷** 私が日本で十年来取り組んでいるのは、京都の丹後地方の「藤織り」を伝承している丹後藤織り保存会です。  
**鞍田** 藤織りの工程もすさまじいですね。



苧麻の「キラ」を取り出す「からむし引き」は盛夏の作業（福島県昭和村） 撮影：鞍田 崇

きた上世屋は雪深く、冬の農閑期の仕事でした。つくる喜びや楽しさもあつたと思いますが、厳しい自然と暮らしが生み出した織物でもあります。

**鞍田** 昭和村では、かつて苧麻とならんで大麻も栽培していた。換金作物である苧麻に対し、大麻は自分たちが使う野良着や普段着の素材とされ、衣服は買うものではなく自らつくるものだったので。そんな時代を生きてきた村の八十年代、九十代の人にとっては、糸績みは当たり前の日常で、村での生活の一コマでした。四季とともにいろいろな風景が巡っていくのと同じように、季節ごとの作業がありました。冬、雪に閉ざされる頃になって炉端に集まってみんなで糸績みは、それはそれで楽しみだったといえます。

現代では、大麻の栽培も免許制になり、ほとんど行われていません。昭和村でも衣服は買うものになった。そうしたなかでも、村の女性は糸づくり、布づくりを、苧麻を用いて続けている。昭和村ではいまなお、暮らしのなかにもの

づくりがはめ込まれた有り様を垣間見ることが出来ます。そこから私たちの暮らしそのものを見直すうえで大事なことが見えてくるような気がします。訪ねるたびに、ものづくりから分断されたままの現代の暮らしを見直す必要を感じもします。

### 暮らしのなかのものづくり

**鞍田** 昭和村では一九九四年から、一年間滞在型の「からむし織体験生事業（通称「織姫・彗星制度」）を実施しています。苧麻の栽培から「からむし織」の一連の工程と山村生活を通じて、村人との交流を深め、昭和村の生活文化を知ってもらうことを目的としています。

この事業は今年で三十周年を迎え、これまで百三十名余りの人を受け入れてきました。興味深いのは、体験生の多くはもとも特に伝統文化や染織に関心があったわけではない、都市部出身者であるにもかかわらず、研修終了後も村に残り、布仕事を継続する人たちがいることです。

体験生として村にきた人たちは、指導役の女性の人柄に魅了されるとともに、ものづくりが日常生活のなかに残っていることに感銘を受けたといえます。苧麻だけで生計を立てるのは厳しいにもかかわらず、いまでは継承者としての自覚をもちながら取り組んでいる人たちもいます。私も一緒に苧麻のこれからを考えてきました。

### 「素材」に注目する理由

**金谷** グローバル化と連動して布づくりの現場は近年変化しています。しかも、インドや日本だけでなく、アジアやアフリカの各地においても、同じような変化が起きている。伝統的な布の文化財化や観光資源化はその代表的なもの



野蚕織物の生産者と金谷美和さん（2018年、インド・アッサム地方） 撮影：上羽陽子



「奈良 木綿手紡ぎの会」が営む綿畑で、木綿花を収穫する土屋美恵子さん

撮影：鞍田 崇

です。

もう一つの重要な変化として、新しい素材の登場がある。一見すると伝統的な文様が織り込まれた手織り布であっても、素材が置き換わっているのです。コットンであつても地域で栽培されてきた在来種ではなく、遺伝子組み換え技術の導入によって大量生産されるコットンに変わっていたり、自家製のコットンを手紡ぎで糸にしていたものが、機械紡績の糸を買ってくるようになっています。手織りという工程が継続していたとしても、糸そのものが、新しい素

材に急速に置き換わっています。

こうした状況から現在、素材に注目しています。特定の地域で栽培・飼育され、糸につくられていたような素材がなくなってしまうと、その素材を使った営み自体がまるごと失われてしまうことになりかねないからです。

**鞍田** コットンについて言えば、国内でも、素材となる木綿の栽培から手がけようという動きが出てきています。奈良市で手織り工房「つちや織物所」を営む土屋美恵子さんもその一人。制作と並行して、「奈良木綿手紡ぎの会」を主宰し、

奈良で採れた綿花で布づくりをするため、近隣の人々と一緒に畑仕事にも勤しんでいます。

**金谷** 二〇二二年から、長野県安曇野市の天蚕てんかんと呼ばれる野生種の蚕を飼育している現場にも通い始めました。インド東部のアッサム地方でも、二種類の野蚕（野生種の蚕）があり、そこでもフィールドワークを行っています。

在来素材の作り手に注目するのは、布づくりの継承にとって、いま一番脆弱なのは素材の部分だからです。素材を自然から得るには、その自然環境をどのように維持していくかに関係しています。藤には里山の維持が欠かせないし、天蚕は農業や生物資源の利用に関わってきます。

### 布づくりは女性の仕事？

**鞍田** 布づくりは歴史的に、洋の東西を問わず女性の営みとして受け継がれてきた側面もあるかと思えます。しかも、その多くは女性が半ば虐げられるような仕事でもあった。しかし、その営みのなか

に凝縮されている、生活に根ざした手仕事ならではの健気さに、あらためて注目すべきではないかと考えています。

**金谷** たしかに、日本や東南アジアでは布をつくるのは女性の仕事で、家事として行われてきました。しかし、インドでは職能集団が布の製作を担ってきたため、基本的に男性の仕事です。ガーナなどアフリカでも男性が織り機に座っていました。世界的にみると、糸づくり、布づくりは必ずしも女性だけの仕事ではなく、地域によっては男性もかなり関わっているようです。

また、伝統的な布づくりというと、牧歌的なイメージがありますが、実は産業化に適している。工程が多いので、分業して効率化をはかることで繊維産業は展開していきました。

### グローバル化における伝統的な手仕事の価値

**鞍田** そういえば産業革命も紡績と織布からでしたね。インドの布づくりの現場は急速に産業化して

いるのでしょうか。

**金谷** 布づくりの工程が機械化される一方で、地域に根差した手仕事による布の評価が高まっています。近年では、ファッション産業

においてサステイナビリティの動向があり、地域の伝統文化を大切にした手仕事の布を使う流れがあります。インドの職人は、自分たちの祖先が行ってきたことが国内

鞍田 崇（くらた・たかし）

1970年兵庫県生まれ。専門は哲学・環境人文学。総合地球環境学研究所特任准教授を経て現職。ローカルスタンダードとインティマシーという視点から、現代社会の思想状況を問う。著書に、『民藝のインティマシー「いとおしさ」をデザインする』（明治大学出版会）、『からむしを績む』（共著、渡し舟）など。



においてサステイナビリティの動向があり、地域の伝統文化を大切にした手仕事の布を使う流れがあります。インドの職人は、自分たちの祖先が行ってきたことが国内外で評価され、経済的価値を生むことにも気づいています。カッチ地方でアジュラクという布を木版捺染技法で染めている職人は、一時スクリーンプリントによる量産化を進めたものの、天然染料による手作業による染色に戻ってきています。グローバルな手仕事の価値を職人が内在化し、自ら「これが伝統的なやり方だ、私たちの手仕事だ」と誇りをもって語ります。

**鞍田** 手仕事ならではの付加価値の再評価という側面のほかに、文化的アイデンティティとして復興する動きもあります。先日、バナナ糸の織物を手がける台湾の先住民クバランの人々に取材する機会があつたのですが、廃れていたその布づくりを再興した背景には、長らく政府から先住民として認定されず、自分たちが独自の文化アイデンティティを有することを示す必要があつたと聞きました。



木版捺染布「アジュラク」を染色する職人。両面の印捺と染色の後で、さらに防染剤と媒染剤の印捺と染色を繰り返すことで、色は深みを増す（2016年、インド、グジャラート州カッチ地方）

撮影：金谷美和

ート地震に見舞われました。グジャラート全体で二万人以上が亡くなる大災害でした。村では工房や家屋が倒壊し、一部の染色職人は



金谷美和 (かねたに・みわ)  
1969年奈良県生まれ。専門は文化人類学。国立民族学博物館研究員を経て現職。インドと日本で布工芸と職人に関する調査研究を行い、大学ではファッションを支えてきた、伝統に根ざした染織の文化、服飾の社会的意味、地域ごとの素材の活用、職人のしごとなどを取り上げる。著書に『布がつくる社会関係：インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』(昭和堂) など。

移転して新しい村をつくり、現在はずばらしい染色産地として発展しています。一方で、もとの村に愛着を感じて、そこに住み続け、染色を続ける人もいます。先祖の墓があるから離れられないとも言いますが、その場所に対する愛着があるのです。

**鞍田** 世襲的な生業なのですか？

**金谷** そうです。カトリーが十六世紀にカッチに移住してきて以来、現在は十一代目になり、なかには、若い十二代目が育ちつつある工房もあります。インドでは、染色のような肉体労働は低い階層の仕事だとみなされています。カースト

やそれに基づいた差別には反対すべきですが、一方で、カーストが基盤になってきた世襲の仕事は、権利でもあり、それがインドで仕事を継承させてきた一つの要因になっていると考えています。

カトリーの場合、親族のネットワークと仕事のネットワークが結びついているので、そのなかに入ってしまったえば、染色に関しては、小さくても何かしらの仕事はあります。現在は、手仕事への評価が高まり、彼らのつくる染め物の需要はあり、後継者不足ということがあります。

### ファッション業界に浸透する環境意識

**鞍田** 若い人たちは、ファッションに関心があればあるほどサステイナブルやエシカル(地球環境に配慮した消費行動)への関心を高くもっています。それと連動して、素材への問題意識や仕事へのリスクペクトも強くなっている。業界全体としての状況はどうですか。

**金谷** サステイナビリティを考えなければファッション産業が成り立たなくなっています。どんな会社、ブランドであっても無視はできません。

**鞍田** 例えば、廃棄を抑制するとかいったことですか。

**金谷** 製造工程で水や電気の使用を抑制する、残布など廃棄物がないような布の裁断を取り入れるなどの環境負荷を軽減する方法があります。また、生産者の労働環境が悪化していないかを確認するなど重要です。素材の生産において環境負荷を与えていないものを選択することもあり、様々な観点から取り入れられています。

私はファッションを専門とする大学で教えています。学生たちもサステイナビリティには非常に関心をもっています。授業でファストファッションを批判的に扱ったドキュメンタリー映画「ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償」を見せます。パングラデシュで縫製工場が入った「ラナ・プラザ」ビルの崩壊事故を扱った場面にショックを受けて、新しく服をつくることに罪悪感を覚えると言う学生もいました。

しかし、サステイナビリティが言われるようになって年数が経ち、素材に関して新しい展開も見られます。例えば、バイオテキスタイルはその一つで、菌類や果物の廃棄物から繊維がつけられるバイオレザーが代表的です。

**鞍田** ケミカルでなく自然な素材を使おうということですか。

**金谷** ケミカルだから悪いというわけではありません。化学繊維メーカーは環境負荷を減らす努力がされていると聞きます。自然素材であれば何でもいいわけではなく、例えば、コットンは栽培に水を大

量に使用するため、コットンの輸入国は、栽培地の水資源を収奪しているという批判があります。大阪のメーカーが開発した、国産のスギヤヒノキの間伐材の繊維をパルプにし、紙にしたらつくった糸を、学生がアパレル製品として提案するプロジェクトに参加しました。廃棄材の利用に加えて、コットンに比べて環境負荷が少ないという利点があります。このように、自然素材に関しても新しい試みが行われています。

**鞍田** 自然素材であれば何でもいいわけではないというのは、とても大事な視点ですね。エコ意識の高まりと連動して、自然素材を求めるニーズも広がっているかと思えますが、生産現場の実際まで想像することはまれで、結果的に環境負荷の高い状況を放置することに加担することにもなりかねません。

### 人はなぜまとうのか

**鞍田** 二〇〇六年に総合地球環境学研究所の施設竣工を記念して、

国際日本文化研究センターとの共催でシンポジウムが行われました。テーマは「人はなぜ花を愛するのか」。その内容は次のようなものでした。「花は人間が生きるために必要ではない。サステイナブルという生きるためにやる方がいいことで、生きるために必要ないことは二の次になってしまいがちだが、環境問題が人間の文化の問題だと考えれば、人間の文化は生きるために必ずしも必要でないものも組み込んだものとして見なければならぬ。人は農業を始めるよりもはるかに前に、花を愛で始めている。一九六〇年代に、イラク北部のクルディスタン地域にあるシャニダール洞窟の人骨の周囲から、植物の大量の花粉が発見された。そのことから人は花にある種の象徴的な意味を込めて、死者に手向けていたのではないか。」

この話には感銘を受けました。現在の衣の素材には、通気性がよい、機能性が高いといった評価があるが、衣服は必ずしも機能性だけでは

ではない要素もあると思います。人間は他の動物に比べて肌が繊細ですから庇護しなければいけないとか、寒さを凌ぐといったことはもちろんありますが、そうした機能性をこえた何かもあるのではないかと。

**金谷** 人間は誰しも衣なしには生存できません。寒さや暑さから身を守るということがあります。それに加えて社会的な属性を示すものでもあります。

世界には、布をまとわない人たちもいます。入れ墨を入れたりボディペインティングをしたり、ビーズなどの装飾品——布ではない衣装を身に着けています。あるいは腰紐一本をつける、そこにビーズが一つ付いているだけで「裸」ではないということになります。

アイヒヤーとローチヒギンスという二人の人類学者によると、「衣装」とは、身体に変形を加えること、および、または付加することの組み合わせだと定義しています。つまり、衣装とは布には限らず身体に付加するもの、例えば化粧や香りといったものや、入れ墨



母の糸績みをまねる少女。当時まだ1歳だった(福島県昭和村) 撮影:鞍田 崇

しれません。人はなんらかのものを身に着けてきたのです。

**鞍田** 腰紐一本を着けていても裸ではない、というのは不思議ですね。

**金谷** そこには、装いの楽しみや欲望もあったのでしょう。人には彩られた衣装への憧れ、そういうものを着たいという欲望があるのではないのでしょうか。

古来、天然染料をつかって色を染めるためには、原料の植物や生物を大量に準備し、材料によって燃料をつかって煮なければなりません。このように古代においては染料が非常に高価で染めるのに手間がかかったので、色のついた衣装を身に着けることができたのは特別な階層の人たちでした。では、一般の人たちはどうしたか。インドの民族刺繍には、少ない色系を技術的に工夫して彩のある衣装をつくる工夫がみとれます。装いの楽しみのために、手間をかけて手仕事を凝らす、ということが行われていました。

一方、産業革命のあとに化学染料ができて、衣装の民主化が起

りました。階層に限定されず、多くの人が多様な色の衣装を身に着けられるようになったことで、衣服の大量生産が始まった。それが現在に至る衣服生産の環境破壊の始まりだと言えますが、しかし同時に、あらゆる階層の人々の着る欲望を満たすことにつながったとも言えます。

**鞍田** 産業化も含めて、布の存在が人類の文化的な営みの原点にある気がしてきます。

### 「衣」全体が家庭内から外部化されてきた

**金谷** インドには布を朽ちるまで使う習慣がありました。ベンガル地方の刺子「カンタ」は、着古した白い木綿布に色糸で刺繍がされています。インドの衣装は一枚布を身体に巻き付ける形式なので、布の再利用がしやすい。

ヒンドゥー教では、縫製した布は宗教的に不浄と見なされているため、サリーの端は縫わずに切りっぱなしです。端から糸が解けてきても、捨てずに取っておいて縫い糸や刺繍糸として使います。こ

のような糸を、女性は木に結びつけて願掛けをします。

衣装として着用した布が古くなると、赤ん坊のおむつにしたり、雑巾にします。さらにポロポロになると、焚付けとして使い切りません。

**鞍田** ポロポロになるまで使うというのは、日本も含めて世界中であつたと思います。

**金谷** 家庭内で衣服をつくり、とことん布を使い切るという文化は日本でもちよつと前までありましたね。

**鞍田** 私が子どものころまでは、肘当てや膝当て、破れたところにアップリケを付けるといったことは普通でした。それがどこかで途切れてしまった。

布を使い切る暮らしを痛感した出来事があります。京都にある自然布専門のアンティークショップで十年ほど前に刺子の特集展がありました。会場で一足の藍染木綿の足袋に目が留まり手にとったのですが、裏返してみてもちよつとしました。破れては継ぎ、破れては継いで、ポロポロになった皮膚の

ようだったからです。少し誇張して言えば、いきなりはらわたを突きつけられたような感じがしました。

現代の私たちは、そこまで布を使い尽くすことはない。ということとは、そこまで一生懸命に生きていないのかもしれない。あそこまで使い尽くすということは、それゆえの辛さや貧しさもあつたわけですが、同時に現代にはない非常に濃密な暮らしもあつたのだと感じました。

こうした暮らしの濃密さに比べると、今のリサイクルはまるで薄っぺらい。例えば、リサイクルに熱心な店に着なくなった服を持っていき、リサイクルボックスに入れて安堵感を得て、また次の商品を買うという感じです。

しかし、そうしたリサイクルで中南米やアフリカに集められた大量の古着の写真をみると、世界中から集まってくるので凄まじい量になってゴミ捨て場に近い。これでリサイクルなのかと思えます。布と人との間には、いまや大きな溝ができてしまっているのではな

いでしょうか。

**金谷** 「衣」全体が、使用者の手から離れ、外部化されてきたのだと思います。

### 身の回りのものができる「プロセス」を見直すこと

**鞍田** 今日の会話を通して、二つの問題があると思いました。一つは身に着ける側、つまり衣服を使う側の問題。例えば、さきほどのリサイクルのように、リサイクルボックスに入れてあとはもう構わないということ、結果的には循環に関しても相変わらず外部化した状態になっている。これをどうすればよいのかということ。

もう一つは、作り手の側の問題。デザイナーはサステイナブルな意識をもっていると思いますが、産業としての服飾の作り手だけではなく、生活のなかで「つくる」ということの意味の重要性です。使の手であり作り手であるような人たちが、今後どのように出てくるのかということは、次の「衣」のかたちを考えるうえでも大事になってくる。そこに何か新しい可能

性はないでしょうか。

**金谷** 丹後藤織り保存会の活動は、資本主義のなかでまわっている経済的価値ではないところで、大事なことが営まれているということに気づかせてくれました。地域で伝承されてきた布づくりを継承するためには、商品化するという方法があります。

しかし、藤織りの場合は、商品化するとかえって継承することが難しくなると保存会の人たちは考えているそうです。糸づくりまでにかかる労力を対価として値段をつける、とてつもなく高価になって、人の手に渡らなくなってしまう。保存会の会長は、日々の暮らしのなかで藤織りを行い、「藤織りのプロセスを理解し、山に野生の藤の蔓を取りに行つて糸をつくつて布になるのだ」ということをわかってくれるに人に藤布をお分けしたい」と語っています。

**鞍田** たしかに「プロセス」がキーワードだと思います。現代は、暮らしては製品というゴールを消費するだけで完結しかねません。でも、本当は、はてしない糸づくり



対談を行ったアーティゾン美術館（東京都中央区）の作品の前で。同じ京都大学大学院人間・環境学研究科出身ということで、すぐに意気投合

の話のように、暮らしとはプロセスの連続のほず。それをどう可視化するか、自分たちの手に取り戻すかが大切なのだらうと思います。

**金谷** 「プロセス」こそが大事だということを意識した、地道な動きがいろいろなところで出てきているのではないかと思います。そこに新しい可能性があると思っています。

**鞍田** 「結局、自分の仕事は自然を汚している」。随分前に染織家

の志村ふくみさんから聞いた言葉です。天然素材の草木染めで素晴らしい仕事をされていますが、人は自然にあるものが一番美しいのに手を加えて汚している、自然のいのちを頂きながら罪なことをしている、という気持ちで向き合っているというのです。

人の営みの原点であればこそ、布から学ぶことはまだまだあるはず。今日はその思いを新たにしました。

# 人は、どうしてビーズを身に着けるのか

池谷和信

国立民族博物館教授、総合研究大学院大学教授

## 先史から時代を超えて存在

**先** 日、インドの首都デリーにある国立博物館の展示を見学した。インダス文明時の発掘資料から現代インドの少数民族であるナガ人の民族資料までが展示されていて、先史から現在までのインドとその周辺地域の歴史を知ることができた。数多くの展示のなかでも時代を超えてビーズが存在していることが印象に残った。イン



ガラスビーズでおおわれた等身大の人像  
国立民族学博物館蔵



インダス文明時代のビーズの首飾り  
(B.C. 2700-2000年) インド国立博物館蔵

ダス文明では、カーネリアンやテラコッタの首飾り、シヤカが誕生してからは石製の仏像に刻まれた装いのためのビーズ、そして、現代のナガではインドやヴェネチアでつくられたガラスやタカラガイ製のビーズ等と、素材や形は変わっても維持されてきたのである。さて、ビーズとは、部材と部材をつなぎあわせたものと定義すると、その誕生の歴史は数万年前の旧石器時代までにさかのぼる。一

般にはガラスや真珠の首飾りのような線状のイメージがあり、木製の数珠もビーズに含まれる。ただ、世界をみわたすと衣服やドレスに縫い付けたり、布の上に縫い込んだりして面状にするビーズも少なくはない。なかには、等身大の木製の骨格にガラスビーズをおおわせたビーズ人像も知られている。世界各地にタカラガイが利用されたビーズが存在するのも興味深い。

され、遠方の地域とのつながりがあったことがわかる。当時、インダスで産出されたカーネリアンは、遠く古代エジプトまで運ばれたといわれる。海から離れたインドの内陸地、ナガでタカラガイが使用されていた。その土地では入手しにくい珍しいビーズを身に着けることにより、首長や富のある人といった地位を示すことにもなる。このように人は、美しさのためだけでなく、自然を利用し、人々とのかわり方を調整あるいは表現するために、ビーズを身に着けてきた。インドとその周辺域において、多様なビーズが現在まで維持されてきたのもそのためである。現在、ビーズはインドでは人気のある土産品としても売られているが、今後、ますます新たな形やユニークな素材を組み合わせたビーズ製品が生まれるであろう。

## 人のかかわり方を表現

それでは、どうして、時代や地域を超えて人びとはビーズを身に付けてきたのであろうか。ビーズには、何らかのメッセージが込められている。まずは、人がビーズの部材を自由に組み合わせることで色や形の好みを表現する。個人の自由から生まれた創造力を示している。石やガラスやタカラガイは、交易品として取引

いけや・かずのぶ  
一九五八年生まれ。狩猟採集民や牧畜民の生態人類学・人文地理学、ビーズでみたホモ・サピエンス史、北東アジア地域およびアフリカ地域研究を専門とする。『アイヌのビーズ』平凡社 など編著書多数。

# 化粧とジェンダー

井上章一

国際日本文化研究センター所長

## 都市化と化粧の習慣

**私** の母は化粧を、あまりしなかった。息子の入学式、その他儀礼的な場へは、紅をさすなどして出席したと思う。しかし、ふだんは素顔でくらししていた。いちど、近所の人にすすめられ、化粧の講習会へでて、ぬりたくられたこともある。だが、あんなふうにはやつすのはこりこりと言ひ、以後は敬遠し続けた。

伝統的な農村漁村の女性に、化粧の習慣はなかったろう。嫁入りの日、あるいは村祭りの日に、白粉をぬる。それぐらいが、関の山だったのではないか。つまり、ある時期まで、大多数の人民は化粧と縁遠いくらしをいとなんできたのである。田園そだちの母も、その延長上にいたのだと思う。この習性をかえたのは、都市の化粧品業に従事する人々である。

彼らは、美しくなろうとする女性にふえることをねがう。その宣伝にもつとめる。そして、都市部から化粧の習慣をひろめてきた。二十世紀以降の都市化現象は、この勢いをあとおしただろう。ついには、たいいていの女性が毎日化粧をする現代社会も、もたらした。

## 新しい美人のイデオロギー

この趨勢は、一九二〇、三〇年代ごろから、美人の論じ方を変え

ていく。それまでにない、新しい物言いを流布させた。いわく、たんに顔形かほかたちの良さとだけ、美人の条件ではありません。内面や個性の輝きを外にあらわすことも、ふくまれます。そこに、百人の女性がいれば、百とおりの美しさがあろうるので、などと。

あるきまりきった型の女性だけが化粧をする状態は、美容産業にうるおいをもたらさない。この業界は、あらゆる女性に、美しくなる努力をしてほしいのである。だから、美人に関する新しいイデオロギーをひねりだす。また、それを社会に蔓延させてきた。あなた

は美しくなれる。あなたも美しくなれる。あなただって美しくなれるのです、と。

ずいぶん、意地の悪い見方だなと思われようか。しかし、私は自分の見取図に、自信をもっている。今でも、化粧品の購買者は、その大半が女性でしめられる。男性に増加の傾向が見られないわけではない。しかし、その多くは髭剃り、整髪、育毛、スキンケアといったところで、しめられる。顔をいろどるところへは、むかいきつていない。女性とくらべれば、まだその普及は限定的である。

ために、美男を論じる言説は旧套をたもっている。内面の輝く人こそが美男だとは、あまり言われない。百人の男性がいれば、百とおりの美しさがあるという文句も、聞こえてこないだろう。美容産業は、まだ男性を籠絡しきれていないのだと思うしかない。

いのうえ・しょういち  
一九五五年、京都生まれ。専門の風俗史・意匠論のほか、日本文化や美人論、関西文化論など幅広い研究で知られる。『京都ぎらい』(新書大賞) など著書多数。



1930年代の化粧品ポスター  
東京平尾賛平商店 (1938年)

私を育てた  
〈風と景〉

幼少期の記憶のなかの景色、人生のターニング・ポイントにまつわる思い出の場所、風の匂い、聞こえる音楽、ふと脳裏に浮かびあがる「心象風景」……。大切な「風と景」について語っていただきます。

# 古の色を伝える植物染めと 祖父が挑んだ幻の染色技法

吉岡更紗 染織家



東大寺の多色夾纈の庭幡と制作中の吉岡常雄氏（『吉岡常雄の仕事』より）

**私** が三歳を迎える頃、祖父が家業である「染司よしおか」の四代目として、大きな仕事を担い、それを完成しようとしていた。

奈良にある東大寺では一九七三（昭和四十八）年から約七年の歳月をかけて、大仏殿の大修理が行われていた。その完成を遂げる落慶法要<sup>\*1</sup>を機会に、日本最古の渡来芸能である「伎楽」という仮面をつけた演者達がコミカルに動く無言劇が復元することとなり、祖父<sup>\*2</sup>はその衣装制作を担っていた。また法要の際には、大仏殿に向かう前庭に「幡」とよばれる旗が掛けられるが、時を同じくして、それを二十坑新しく制作したのである。幡には唐花文と呼ばれる大

きな花の模様を、「幻の染色方法」と呼ばれる多色夾纈染<sup>きょうけちぞめ</sup>で表していた。

落慶法要は一九八〇（昭和五十五年）年秋に執り行われ、私も家族に連れられて、大仏殿の前で大勢の方々と記念撮影をしている写真が残っているが、その当時の記憶は朧気である。

しかし、その時の祖父の幡や伎楽装束の復元が撮影され、その後ドキュメンタリー番組となった。その当時生家では、ベータという今はなきビデオテープで番組を録画していた。リモコンもなく、再生した後また見たい時には、ボタンを押して、巻き戻しをしてから見るという形であった。両親によ

ると当時の私は、子供向けのテレビ番組の合間に、その祖父が出演している番組を何度も何度も繰り返し見続けていたのだという。

## 失敗か成功かも、 全て染め上げてからわかる

祖父は戦後に染司よしおかの四代目となり家業を継ぎ、正倉院に遺された染織品を間近でみることでできる正倉院展を拝見したことをきっかけに、化学染料だけではない古法である天然染料を使った染色に挑むようになる。その上、夾纈や縹<sup>ろうけち</sup>のような失われた技

法についても研究をはじめめる。

多色夾纈という技法は、インドで生まれ、シルクロードを東に進み、中国を経由し、日本に伝わった。東大寺を建立した聖武天皇の遺愛の品が収まる東大寺正倉院には、膨大な数の多色夾纈で染められた品が遺されているが、その技法は平安時代以降に途絶え、道具なども残されていないことから、幻の技法となっていた。

夾纈は、二枚の板に同じ文様を彫り、その間に布を挟んで染め上げる方法で、様々な色を使う多色夾纈の場合は、あらかじめ染料が浸透するように文様の中に無数の孔をあけておき、染める染料によって防染のための栓を詰め替える。化学染料による注染の技術であれば、その孔に染料を注ぐだけで完成するが、植物の染料であれば布を挟んだ板ごと染料に浸けなければならぬので、祖父はこうした方法を編み出した。当時、染色技術者からは批判が多かったそうだが、その後インドで、祖父が考え出したような版木がみつかり、それが正しかったことが証明された



東大寺大仏発願1250年慶讃法要での伎楽（1993年）。呉王と呉女の衣装は吉岡幸雄氏の制作

## 映像や作品が伝える ものを見る眼

その苦心をとらえた番組を、私は何度も繰り返しビデオで見ているので、「ここでお爺ちゃん失敗しはる」と声に出していたのだそう。何度も何度も失敗を繰り返して、やがて多色唐花文夾纈は無事に完成する。そして幡に仕立てられた後、落慶法要の際には前庭に掲げられ、吹く風になびいて、大仏殿修理完成の喜びを伝えたのである。

紆余曲折あったが、染司よしおかはその後父が継ぎ、そして私が

継承することになった。祖父から直接指導をされることはなかったが、その苦勞を映像や残してくれた作品が伝えてくれている。また、父からは美しい色や染織品など「ものを見る眼」を鍛えるように教えられた。それが自分自身の原点となっている。

\*1 神社・仏閣の新築または補修工事の落成を祝う法要

\*2 吉岡常雄（一九四六―八八）染司よしおかの四代目。幸雄（五代目）とともに古代染色の研究と文化財復元に功績を残した。



よしおか・さらさ  
アパレルデザイン会社勤務を経て、愛媛県西予市野村町シルク博物館にて染織を学ぶ。2008年より生家である「染司よしおか」で製作を行っている。「染司よしおか」は京都で江戸時代より200年以上続く染屋で、すべて自然界に存在する染料で染色をしている。奈良東大寺修二会など、古社寺の行事に関わり、国宝の復元なども手掛ける。

# 南アルプスから考える 自然との共生

地球上では、さまざまな動植物がたがいに助け合い、利用し合  
いながら生命を育んでいます。私たち人間もその環を形成する  
要素の一つです。生きものどうしの連環、そして、そこに関わ  
る人間の役割がつくる〈輪っか〉について語っていただき、サ  
イエンス・コラムです。

## 秋道智彌

山梨県立富士山世界遺産センター所長

### 二

〇二二、二三年の夏、南アルプスに赴いた。南アルプス（赤石山脈）は静岡県、長野県、山梨県にまたがる南北に連なる山脈で、富士山に次いで高い北岳（三一九三メートル）や塩見岳（三〇五二メートル）からは、流長一六八キロメートルの大井川が駿河湾に注ぐ。大井川流域では、上流から下流域まで多様な自然文化環境が展開している。

### 山岳の高度と人のかかわり

日本の山岳では、高度別に異な  
った名称が用いられる。たとえば、  
富士山では下から「草山」、「木山」、  
「焼山」、南アルプスの塩見岳では  
「サトヤマ」、「チカヤマ」、「タケ」  
の区分がある。里山・近山では、  
山麓住民により焼畑農耕、山菜採  
集、木材の利用、草の施肥利用、放  
牧、溪流魚の漁撈、狩猟、養蜂な



オオシラビソの球果

ど、多様な生業が営まれてきた。  
一方、焼山やタケ（岳）は、修験  
者の修行、鉱山開発、葉草採集な  
ど、地域住民以外に外部者の参入  
する領域でもある。現代ではアル  
ピニストの登山者も増加してきた。  
山岳部では垂直高度で人間とのか  
かわりは層序化されている。  
問題は、地球の気候変動や開発  
などによる影響を受けてきた山の  
野生生物の動向であり、人間との  
折り合いが焦点となる点である。

### 井川から南アルプスへ

大井川最上流部の井川村（静岡  
市葵区）（七三二・三メートル）は、

賞味され、子どもたちへと伝承さ  
れている。

### オオシラビソをめぐって

千枚小屋に至る登山道には、シ  
ラビソやオオシラビソなどが混生  
する。とりわけオオシラビソ（ア  
オモリトドマツ）は中部地方以北  
から東北地方の亜高山地帯に分布

し、南アルプスは南限にあたる。  
多雪地帯に適応するマツ科モミ属  
の日本固有種で、積雪期に樹氷を  
形成する。東北では方言でモロビ  
と呼ばれ、岩手県八幡平には諸松  
岳（二五一六メートル）がある。モ  
ロビでも、氷点下になると細胞外  
の水分が凍結（細胞外凍結）して  
組織や細胞を保護し、細胞内では  
水分をドロドロにして凍結を防ぎ、  
細胞が死ぬことはない。

江戸時代、本草学者の菅江真澄  
（一七五四～一八二九）は秋田県の  
森吉山（二四五四・二メートル、  
現・北秋田市）に二度登頂し、森  
吉山のモロビの絵を残している。  
森吉山は日本海を行きかう北前船  
にとり航海の重要な目安とされた。  
登拝者は森吉山のモロビの枝を持  
ち帰って神棚に供えた。モロビの  
香りは穢れを払い、魔除けの効力  
があるとされていた。阿仁マタギ  
は、旅立ちの際には、モロビを燻  
して全身を浄め、行路の安全を祈  
願した。モロビを焚くと、雷鳴が  
なくなるとの民間伝承もある。

### 南アルプスの自然と共生



シカの焼肉料理  
撮影：金原みつみ



南アルプスの花畑とシカ除けの防護ネット  
撮影：高塚雅文



森吉山のモロビ（右）と菅江真澄  
が描いた森吉山（出典：日記『み  
かべのよろい』1805年、秋田県立  
博物館蔵写本）

ろう。井川では、地域おこし協力  
隊の若い女性の精力的な活動が展  
開している。それらを支援する意  
味で提起したいのは、オオシラビ  
ソの香油成分を生かした芳香剤の  
開発産業である。森林浴も重要で  
あるが、亜高山帯の森林を持続的  
に維持しながら人間が一部、産業  
として利用する工夫があってもよ  
い。在来作物の遺伝資源の保存、  
シカの駆除と利用を含めると、  
南アルプスは自然と人間の共生を  
多面的に考えるホットスポットで  
あることはまちがいない。

#### 【参考文献】

- 菅江真澄『菅江真澄遊覧記1』東洋文庫、一九六  
五年
- 田口洋美『マタギ 森と狩人の記録』慶友社、一  
九九四年
- 秋道智彌『霊峰の文化史』勉誠出版、二〇一三年



あきみち・ともや  
1946年京都市生まれ。総合地球環  
境学研究所名誉教授。国立民族学  
博物館、総合研究大学院大学、総  
合地球環境学研究所などで教授を  
歴任。専門は生態人類学。



レーブン博士、ジンバブエのチャング彫刻群の前で、2000年

「コスモス国際賞 二〇〇三年受賞者

Dr. Peter Hamilton Raven

# ピーター・ハミルトン・レーブン博士

昆虫や植物など生き物が大好きな子どもは少なくありませんが、多くの人は大人になる過程で、その情熱を少しずつ失っていきます。ピーター・H・レーブン博士は少年時代に採集していた新種の植物、並びにその仲間を詳しく研究することで大きな成果をあげるところからキャリアをスタートされました。その後、世界中の熱帯域に生育する植物種を科学的に知るための研究を大規模に展開すると同時に、絶滅が危惧されるそれらの種を保全することの重要性を世界に向けて発信し続けています。

寄稿・村上哲明（東京都立大学教授）

## ピ

ーター・ハミルトン・レーブン博士は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）大学院の学生時代に、アカバナ科植物の系統分類学的研究で大きな研究成果をあげました。そして、同校で博士号の学位を取得した後、スタンフォード大学の准教授になります。そこで、同僚のポール・R・エリック博士とともに、植物と植食性昆虫とが互いに影響しあいながら進化することを突き

止め、「共進化（coevolution）」という新しい用語も生み出しました。博士らが一九六四年に『エヴォルーション』誌に発表した共進化についての論文「蝶と植物 共進化の研究」\*1は特に有名です。

レーブン博士は、植物と菌根菌や植物と送粉昆虫との共進化についても研究を展開し、現在大きな注目を集めている「送粉生物学」や「花生態学」と呼ばれる分野の礎を最初に築いた研究者でもあり

ます。さらに、生物の隔離分布を説明するために、最初にブレートテクトニクス（大陸移動の理論）に着目し、生物地理学の分野でも独創性の高い研究を行いました。

### 植物園から 全世界へ向けた発信

このように若い頃から研究者として大成功を収めていましたが、一九六〇年代から地球上の多くの生物種が絶滅に瀕していることに

### 【コスモス国際賞】 地球の航路を探る

花の万博から30余年、花博記念協会は「自然と人間との共生」を活動のテーマに掲げてきました。地球のためのすぐれた業績を残した方を顕彰するコスモス国際賞は、これまで30回を数えます。

#### 受賞のポイント

- ◎共生の理念の形成、発展に寄与すること
- ◎地球的視点に立ち、長期的な視野をもつこと
- ◎総合的な視点での研究や活動であること



台湾の合歡山近くの高山草原で、1995年

様性の保全と持続可能な未来の実現に向けての大きな貢献と重なるものです。レーブン博士がこの北米で最も伝統的な植物園に赴任したときには、学位をもつ植物学者は三人だけでしたが、十余年で、五十人を超えるまでに拡大し、また、私立の機関ですが、今ではミズーリ州とセントルイス市が三分の一ずつの経費を提供するようになっていきます。

### 生物多様性保全と フロラの解明

ミズーリ植物園では、生物多様性の保全の基礎となるフロラ（それぞれの地域にどのような種が生育しているか）の解明のための調査・研究を、中南米を中心にアフリカやアジアも含めて熱帯域の二十以上の国々で進めてきました。同園には、様々な国・地域から学位をもつ多数の研究者が集まっており、世界各地で植物の多様性についての研究を行っています。これらの研究者は、各自が担当する国などでフィールド調査を定期的に行い（あるいは調査対象国内に

設置された拠点に長期駐在して）、植物の採集や現地でのデータ収集を行っています。こうした調査は、植物の生態や分布情報の理解を深めるためにも重要な活動であり、絶滅が危惧される植物種の特定や保全活動の基盤となっています。得られた研究成果は、地域や特定の国ごとのフロラをまとめた本として刊行されます。それによって、それぞれの地域の植物群の情報が体系化され、一般の人々も利用できるようになりました。さらに、収集された植物情報をデジタ

ル化して、ミズーリ植物園が一九八〇年代にいち早く始めた「TROPICOS」と呼ばれるデータベースシステム（現在、一三八万種の名、六八四万点の標本情報、さらに一五四万枚の画像が登録されています）などを活用して、オンラインリソースとしても提供しています。これにより世界の研究者はもとより、国際的な保全活動家も必要な情報に容易にアクセスできるように なっています。

### 学術と実践の両面から 生物多様性の重要性を発信

こうしたミズーリ植物園の活動を通じてレーブン博士は、より直接的に生物多様性の保全に関わる事業も行ってきました。絶滅の危機に瀕している植物の収集、保存、および増殖に関するプログラムなどを実施しています。特に、種の保存プロジェクトでは、多数の植物種の種子を長期保存しています。現地のコミュニティや先住民と連携して、持続可能な森林管理や伝統的な植物知識の保存にも取り組んでいます。



建設中のミズーリ植物園

いち早く着目し、人類が生存し続けるためには、地球上の生物多様性を保全することが不可欠であると、全世界に向けて発信を始めます。それは、世界の植物学者として例のないことでした。

一九七一年にミズーリ植物園の園長に就任すると、二〇一〇年まで四十年にわたって強いリーダーシップを発揮し、この植物園を世界的な植物多様性の研究と保全の中心地にしました。ミズーリ植物園が果たしてきた重要な役割は、そのまま、レーブン博士の生物多



監修  
佐藤裕司  
(兵庫県立大学)

# 絶滅が危惧される 淡水産の紅藻類 チスジノリ

日本列島には約5,000種類の在来植物があるといわれていますが、開発や乱獲、外来種の侵入や気候変動などの影響で、その生息地や個体数は減少しています。花博記念協会は、こうした在来植物の現状を調査し、植物本体を採取することなく動画で記録しました。今では生息していない、失われた地域もありますが、その成果は「プラント・フォト・ハンティング」として、協会ホームページで公開しています。このコーナーでは、貴重なデータの中から、特徴的な種を取り上げて紹介します。

\*学会や展示会などへの動画 (DVD) の貸し出しもしています。 <https://www.expo-cosmos.or.jp/main/pph/index.html>



**チスジノリ** 紅藻類チスジノリ科  
**学名:** Thorea okadae Yamada  
**原産地:** 日本 (タイプ産地: 鹿児島県伊佐市川内川)  
**開花期:** 秋から春に配偶体が出現  
写真提供: KANSOテクノス



兵庫県安室川に生育するチスジノリ。5ミリ程度の小さな孢子体(上)が本体で、長く伸びる藻が植物の花に相当する配偶体(左) 写真提供: 佐藤裕司

## 生息地

- 絶滅危惧Ⅰ種
- 絶滅危惧Ⅱ種



©2021 野生生物調査協会&EnVision環境保全事務所

**チ** スジノリは淡水産の紅藻類で、形はひも状で、多数分岐し、色は暗紫色または紅色なため、血管を思わせることから「血条苔」という名がついています。清澄な川と速い水の流れ、半日陰の環境を好むチスジノリ。九州と本州の一部の限られた河川に生育する日本固有の種です。鹿児島県川内川と熊本県菊池川の生育地は、国指定の天然記念物となっており、環境省レッドデータブックでは絶滅危惧種Ⅱ類に指定されています。

藻体の基部は、流されないよう川底の石などに着き、良く育てば一メートルを超える長さまでになります。川内川では三メートルという記録があるそうです。秋から春にかけて繁茂しますが、夏にはいったん消失します。じつは、この長くなる個体はチスジノリの配偶体で種子植物の花に相当します。しかも雌雄の生殖器官が別々の個体にできる雌雄異株です。つまり雌花と雄花があるというわけです。チスジノリの生活史は複雑で、配偶体(有性世代)とシヤントランシア期とよばれる孢子体(無性世代)による異型世代が存在

します。孢子体は川底の石に着生するわずか五ミリ程度の塊状で、これこそがチスジノリの本体です。河川流量の年変動との比較から、夏期に大きな洪水が発生すると、冬期により多くの「花」を咲かせる傾向があるとされますが、詳しいことはよくわかっていません。チスジノリをはじめとする淡水紅藻類は、絶滅が危惧されているものばかりですが、昔は食べられるほど取れたそうですから、再びそのような光景を見てみたいものです。

また、中南米などの学生や研究者を対象に、教育プログラムや研究の機会を提供しており、地域の生物多様性保全のための組織的能力向上を支援してきました。これによって、世界中の植物学者や研究機関との強固な協力関係を築き上げることにも成功し、共同でのフロラ研究やデータの共有が促進されています。中国科学院昆明植物研究所・所長の呉征鑑博士(一九九九年コスモス国際賞受賞者)と協力し、中国植物誌の英語版<sup>\*2</sup>を出版したことは、その成果の一つです。

さらに、一般市民や学生を対象とした教育プログラムなどの提供や、大学生向けの生物学や植物学の教科書も出版しており、特に『レーブン式植物の生物学』<sup>\*3</sup>は植物学の定番の教科書となるなど、教育面での貢献も大きなものがあります。

専門的な知識と情熱で、学術と実践の両面から、生物多様性の保全と環境の持続可能な利用の発信で世界を率先するレーブン博士の活動は、今も続いています。

\*1 Butterflies and Plants: A Study in Coevolution  
\*2 Flora of China  
\*3 Raven Biology of Plants

## 叡智の人の足跡

1936年、レーブン博士は中国(当時は中華民国)の上海市で、裕福なアメリカ人の両親のもとに生まれました。しかし、1937年に日中戦争が起こると、一家はアメリカに帰国し、サンフランシスコで暮らし始めます。

昆虫や植物など様々な生き物に興味をもっていた博士は、その頃からフィールド植物分類学者としての大なる才能を発揮し始めていました。14歳の時、近くのシエラネバダ山脈に生育する337種を含む506点もの植物標本を採集し、そのなかには、少し変わった形の *Clarkia rubicunda* (アカバナ科)



ミズーリ植物園を訪問された天皇后陛下(現・上皇上皇后陛下)と1994年

の標本も含まれていました。この奇妙な植物標本をハーバリウム(標本庫)で見つけた、植物分類の専門家ハーラン・ルイス博士は、16歳のピーター少年に生育地を案内してもらっています。その8年後、UCLAの大学院生となり、ルイス博士と共著で、これを新種 *C. franciscana* として発表。レーブン博士はわずか14歳で、新種の植物標本を採集していたのです。

さらにこの種の染色体なども詳しく研究し、*C. franciscana* が祖先種の *C. rubicunda* から染色体の構造が変化することで急速に(1万2000年くらい前に)種分化し、



ミズーリ植物園の温室で、植物間の交雑実験を行う博士、1974年



生後間もなく父ウォルターと上海で1936年

母種と交雑しても子孫を残せない別の種になったことを明らかにしました。新しい種が生まれるのには通常、数百万年かかるので、1万年程度で種分化が起きたとすれば、急速です。植物が染色体の構造変化によって素早く種分化しうることを示したことは、進化学的にも大発見でした。

博士は、その後に *Clarkia* 属を含むアカバナ科の専門家となり、種レベルならびに系統分類学的な整理を進め、分類学分野でも大きな研究成果をあげました。これらの成果によってUCLAで植物学の博士号を取得しています。14歳の時運命的に出会った *C. franciscana* が、レーブン博士を生物多様性研究の道に導いたともいえるでしょう。

**ス** タンプラリーの実施期間は  
四月中旬から六月で、「らんまん」の放映開始と花の見頃の時期がちょうど重なったこともあり、用意していた台紙は各園から勢いよくなかっていきました。また、抽選で「高知県立牧野植物園招待券」または「協会記念グッズ(植物関連)」が当たる懸賞も用意。準備万全です。

**スタンプ集めが開いた植物園への扉**

応募要件は三園「咲くやこの花館」(大阪市)、「大阪市立長居植物園」(大阪市)「大阪公立大学附属植物園」(大阪府交野市)を巡り、すべてのスタンプを集めることでしたが、結果は予想を大幅に上回る三百通以上の応募があり、応募がきには「きれいに管理して下さい、ありがとうございます」といった植物園の方々に對する感謝の念や、「今まで行く機会がなかった植物園に行くことができました」「また複数箇所を巡る企画をしてほしい」といった新たな知見への喜びの声が溢れていました。本企画を通じて、「植物の楽しさ、大切さを知ってもらおう」という目的が少なからず達成できたことを、応募がきを見ながら実感しました。ご協力をいただきました三園の関係者の皆様はこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

**牧野富太郎博士と植物標本への高い関心**

公益社団法人日本植物園協会と共催で二〇二三年七月三〇日(日)に、日比谷図書文化館大ホール(東京都千代田区)にて「牧野富太郎と植物」『らんまん』の植物たちの魅力を伝える」を開催しました。テレビ人気は大きく、募集定員二百名は一週間で満席になり、応募申込み時の質問コーナーでは、六十人余の方から質問をいただきました。その内容は、①牧野富太郎博士、②ドラマ「らんまん」、③図書や資料、④植物分類(APG分類など)・命名など、⑤個々の植物、⑥標本などに対する幅広いものでした。NHKの「らんま

**普及啓発事業**

**牧野富太郎スタンプラリー・シンポジウム**

花博記念協会は、二〇二三年四月に始まったNHK連続小説「らんまん」の放映を機に、植物の楽しさ、大切さを知ってもらうため、大阪府内の三園を巡る「牧野富太郎スタンプラリー」と、日本植物園協会との連携によるシンポジウムを開催しました。



ん」の影響もあり、植物への関心の高さがうかがわれました。

講演では、牧野富太郎にゆかりのある東京大学小石川植物園の元園長の邑田仁博士(東京大学名誉教授)から、牧野富太郎の緻密なムジナモの図譜紹介、さく葉標本

づくりのデモンストレーション、植物図鑑の紹介があり、その後、「らんまん」の植物監修をされた田中伸幸博士(国立科学博物館陸上植物研究グループ長)からは、番組で使用したレプリカ標本の裏話や、植物考証ならぬNHK交渉であったとのユーモアを交えた苦労話を、多くの植物写真を交え紹介がありました。

その後のシンポジウムには、東京都練馬区立牧野記念庭園の田中純子学芸員も加わり、牧野富太郎に関わる植物の話、質問への回答クイズも交えて植物の魅力を伝えていただきました。



ラリーが開催された大阪公立大学附属植物園の受付



「らんまん」の植物監修をされた田中伸幸博士(国立科学博物館)の講演

**編集後記**

2023年9月は平均気温が観測史上最高を記録しましたが、一転して10月に入ると急に肌寒くなりました。このような急激な変化は着る服に悩まされます。皆さんは日頃どのように服を選んでますか? 服選びは、気温のほか、流行、TPOなど、様々な要素がありますが、いまはサステイナブルな要素も重要とされており、ファッション産業も持続可能性との両立がもたらわれています。この秋からは、私自身も地球環境に配慮しながら、自分に合った「衣」を見つけたいと思います。(花博記念協会A.I.)

**『KOSMOS』の誌名にこめた思い**

本誌のタイトルは、COSMOSではなく、あえてKOSMOSとしています。どちらも意識・心の領域をも含めた「秩序と調和の宇宙」を意味しますが、真の共生の在り方を探る本誌として、古代ギリシアの哲学者たちが自然科学を論じたときに用いたKOSMOSを使うことで、人類の本質的課題にアプローチしたいと考えています。

各園で紹介された牧野富太郎ゆかりの植物。①ヒルムシロ(大阪公立大学附属植物園)、②ユズ(大阪市立長居植物園)、③ムジナモ(咲くやこの花館)



# 菊

## 日本人の 感性のなかで 独自に発展

秋になると全国各地で開かれる菊花品評会や菊まつりは、日本ならではの風物詩。江戸時代、変化に富む園芸種の菊花壇や、菊細工の見世物が流行し、それを支えたのが、花弁のまばらな「肥後菊」と花弁が咲き始めてから変化していく「江戸菊」。これらに花の中心が盛り上がりつつ咲く「丁子菊」を加えた伝統的な中輪種は「古典菊」と呼ばれています。

**野** 菊は日本各地に咲きますが、園芸花としての菊（家菊）

は中国大陸が起源で、日本には奈良時代に伝来しました。菊は中国では周代から愛され、文献には菊酒で長寿を祝う習わしや、菊の咲く地方の人は皆百二十、三十歳の長寿であるといった記述があり、そのため「不老長寿の花」、あるいは「延年草」「寿客」とも言われます。このような中国の菊文化の影響のもと、奈良時代の日本でも菊は靈草として珍重されました。菊は日本の風土気候によく馴染んだため、その後広く栽培され、日本人の感性のなかで独自の発展を遂げました。

**不老長寿の靈草から  
観賞用の美花へ**

平安時代になると大陸産の花桃、花梅、ニワザクラとともに、庭の下草に菊を植えるのが教養ある貴族の象徴となり、美花として観賞

の対象となっていくきます。菊酒を飲む風習が宮中で広まったのもこのころです。中国に做った重陽の節句に「着せ綿<sup>わた</sup>」や「菊合せ」の催しが行われました。「着せ綿」は、九月九日の前夜、菊の花に真綿を包みかぶせ、翌朝、この菊の香りと露に湿った綿で身を清めて長寿を願う行事。また、『古今和歌集』でも多く詠まれた「菊合せ」とは、二手に分かれた人々が菊の花に歌を添えて提出し、その優劣を競う遊びです。こうした菊花をめぐる催しは、平安貴族の年中行事として定着していきました。

江戸時代になると、徳川幕府が政策として菊花を取り入れ、重陽の節句に諸侯を登城させて式典を行ったため、この風習が江戸府中から各地の城下町にも伝わり、庶民にまで広がりました。江戸の人々は九月九日には菊花を飾って草餅を食べ、菊の花びらを浮かべた酒を呑みました。こうした風潮

が高じ、江戸時代には営利的な菊比べが行われるようになり、現代の菊人形の原型である菊細工などの園芸技術も発達しました。なお、江戸時代には嵯峨菊、伊勢菊、江戸菊、肥後菊などの新品種が作り出され、これらは現在では古典菊を代表するものとなっています。

【参考文献】 柏岡積三・萩原樹徳  
『絵で見る伝統園芸植物と文化』一九九七年



古典菊のひとつ丁子菊（上）  
小国政 画『五節句之内 九月重陽の節』  
長谷川壽美、1896年（左）  
出典：国立国会図書館デジタルコレクション



### 表紙の解説

#### 「鬱金色 うこんいろ」

インド原産の鬱金草は中国を経て18世紀に渡来し、沖縄など温暖な地域で栽培された。派手好みの江戸時代前期、鮮やかな黄色は人気が高く、琉球では王族など高貴な人々が身に着けた。また、鬱金で染められた紅花などで灰汁で染めた温かい黄色も好まれた。染料植物の多くが漢方薬でもあり「衣」と「医」のつながりを連想させる。「写真」黄金繭と絹糸、ウコンの根、紅花、クチナシの実、首里織を模した那覇文化芸術劇場なはーとの客席（撮影・大野繁）

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会  
情報誌 KOSMOS——こすもす  
第12号  
2023年11月7日発行

発行 公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会  
〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2番136号  
TEL:06-6915-4500 FAX:06-6915-4524  
URL:https://www.expo-cosmos.or.jp/

制作協力 株式会社ブックエンド  
デザイン ごぼうデザイン事務所